

セントクリストファーネビスの夜

御宮狼

第二話

1

テーブルの横を過ぎていったのは二人組みの白人だ。椅子に座り酒を飲んでいた黒人がその男たちに呟いた。坊や、傘を拾いなとか、そんなところだろう。

呼び止められた片方の金髪男が雨で濡れきった黒い傘を拾いあげる振り向きざまに黒人の後頭部を一撃した。黒人は頭を両腕で被いテーブルにうずくまった。相棒の赤毛の男がその頭にビールをぶっかけた。豚の眼しやがって！

しかし彼らの攻撃はそこまでだった。黒人は立ち上がると相手からビール瓶を奪い、その脳天を直撃した。瓶は破裂し、赤毛はうめきとともに頭を抱え、両膝を床についた。そして胸ぐらを掴んで体を浮かせるとハンマーみたいな右腕を腹部にのめり込ませた。白い男は泡を吐き、膝を突いて顔からスローモーションで倒れて転がった。

横で金髪男が傘を振り回し、テーブルを蹴り倒しながら大声で喚き散らしている。黒人は、今度はゆっくりと金髪男に近づき、その首を背後から締め上げた。続けてでこぼこのコンクリート床に足で頭蓋を押しつけると、金髪は悲鳴をあげた。仕上げに、顔面に右拳をのめり込ませて鼻骨をへし折り、顎下に見事なアッパーを決めた。のけ反った体が、仰向けのままコップや皿の散乱した床にぶっ倒れていった。

「やったあ」

「ジョー、最高！」

香村の隣で、アレサとソウルの女が同時に歓声を上げ

た。

*

ソウル。そのカフェ兼食堂は米軍キャンプにほど近い。朝鮮や西洋の値の張らない料理と酒が揃っている。薄暗い照明の下で取り引きに夢中になっている男たちはこの近辺で幅を利かせている連中だ。賭け事もある。じつと恋人を待つ男は決まって店の隅に座り定刻になると消えていく。飲んだくれの男は閉店までつぶれたままだ。客の大方は軍の関係者たちで、彼等を訪ねるようにして新しい客は出入りする。

夜は無国籍音楽が流れ、百ほどもあるテーブルの方々で肉を焼く火が上がる。その煙を遠景に、中央のホールでは、男女が時代遅れのダンスを踊り、老人が自慢のステップを披露する。別室では玉突きができる。年中賑っている。日に一度はかならず喧嘩があり、月に一度は殺し紛いの争いが起きる。腰を落ち着けて酒を飲み、料理を食べるというのではない。いつでも人が流れ、大量で無名の出入りがある。警官は立ち寄ることもない。

「JVはいい店をつくったわ」

スペイン女アレサが言うと、

「街で一番のていたらくね」とソウル女は返した。

「死ぬのはどっちだ！ 黒豚か白狐か」

ワインをやりながら、白人と黒人の争いを物見するアメリカ野郎ブリジスが言った。

「賭ける前にカタがつくだろ」

頑強な小男ボールデンの言葉にブリジスは舌を鳴らした。

「ジョーは店の専属用心棒よ」

ソウル女が遮った。

「日雇のギャラは毎日の酒代で消えちゃう。いつも入り口に一番近いあのテーブルを根城に開店からおしまいまでああやって店全体をにらんで飲んでるのよ。毎晩おんなじジンとカルビだけ食べてる。ほんとにカルビだけしか食べないのよ」

「喧嘩のお相手は高値で売れる。無銭飲食者の捕獲は一匹につきバーボン一瓶。あとはカルビ三昧ってとこか」

「いい商売ね」

スペイン男のピンセントに恋人アレサが掛け合った。

「豚が牛食うのか」とブリジス。

「肛門からパイプ突っ込んで焼酎ぶっかけて丸焼きで売られるのが落ちだ」

「酒でいい具合に柔らかい」言いながら香村は豚の丸焼きからフォークとナイフで目玉をくり貫き、口に入れた。

「どっちの豚だ？」

「よしなさいよ、ばかね」

ピンセントのジョークをアレサが嗜めた。

「物騒なのは御免だぜ」言ってスキンヘッドのブリジスはチューインガムを舌下に隠してビールを一息に飲んだ。

「嘘つけ！」

ドイツ人ポールデンがやじった。ピンセントはアレサの腰に腕を回しながらグラスをなめたあと同じグラスの酒を女に飲ませて囁いた。

「今夜はなんもないってよ」

「この世の終わりだ」

「豚の執念でこの世は薔薇色に変わる」

言って香村は豚の背肉に挑む。

「きっとそうよ」

「なんにもいらないんだから」

ソウル女とアレサが同時に応えた。

「何も無い。何も無い」

調子を付けたスキンヘッドがアレサに片目で合図を送った。

何も無い。何もいら無い。それは嘘だろう。何も無い日々。彼等にとってそれこそが最悪の日々だ。

*

黒人に叩きのめされ、男たちは雨中へ逃げていった。ジョーの襟から胸にかけて青シャツが裂け、耳の傷口を流れ落ちた血で黒くなっている。

男の店員が倒れた椅子と木製テーブルを引き起こした。テーブルにフォークが折れ曲がったまま刺さっている。

ジョーは地面に転がった酒瓶を拾い上げ、栓を抜いてラッパ飲みをはじめた。その足元で店員が、床に散った

皿やグラス、肉や魚の料理を淡々と片づけている。まるでルーティンワークのように。殺し合いもまた店のメニューの一つあるかのように。

ジョーの目前に真新しいグラスが立った。

*

首を切られた豚の顔がボールデンと向き合うように卓上にのり、すぐ横にはこんがり焼き上がった胴体がある。

蛸三匹が入ったどんぶりを豚の首の側に置いて若い娘が逃げていった。

「JV、遅すぎる」

「ほんとよ。子供できちゃう」

「奴は約束を守る」

「その通り。だが百に一度だ」

「不法滞在の彼はペキン経由で逃亡した。永久国外追放だ」

「お供の小犬はご機嫌斜めでいらっしゃる」

「犬の耳にはセンサーが装着してあって外と常時連絡を取り合っている」

「ご乱心の殿はお出かけできない」

「二重スパイだ！」

ブリジスが起こし、アレサが同調する。ボールデンが水を入れ、香村がひねる。ブリジスの捨て台詞にピンセントが片づける。いっせいに笑う。いつものパターンだ。

ドアが飛ぶように開き、風と雨が吹き込んだ。

「また奴の派手な登場だ」

だが現れたのは栗色の髪をした知らない女とそれをエスコートするサングラスを掛けた長身の男だ。コートから雨の滴が滴っている。ブリジスの読みはずれた。

長身の男は何事か女に話しかけ、店の最奥にある香村たちのテーブルを指差したあと、消えていった。

女が近づいてきた。

「JVは女にも変装するのか」

ブリジスは相変わらずだ。

女が席に着いた。誰も会釈をしない。

「美しい方。紹介して」

アレサがソウル女に言った。
「私も知らない」
「またどこかでJVが拾ったんだろ」
「猫か」
ブリジスにビンセントがつないだ。
「どうだっていいじゃない、乾杯しよ」
ソウル女が気を効かせた。
「JVはご機嫌斜め？」とアレサ。
「子供作っちゃえ」ブリジスだ。
「私は彼の代理人よ」
初めて女は口をきいた。
「なんだ秘書か。つまらん」ボールデンは楽しんでいる。
「違う。通訳よ。それも時間給の」
「もっとくだらん！」とビンセント。
「予告通りのピンクパンサーだ」
「耳裏のセンサーに気をつけろ！」
二人の掛けあいにブリジスがばか笑いし、引きずられるように回りが笑った。

5

*

蛸は何度もどんぶりから這い出し、その度にソウル女が中へ戻した。
「遺留品はどうしたんだ？」
耳たぶに彫った緑色の入れ墨を触りながらビンセントが訊いた。
「残ってない」
ソウル女が答える。
「何の話だ」ボールデンが遮る。
「血の噴水のことよ」とアレサ。
「血の噴水？」
「お前知らないのか」言ってブリジスは豚の分厚い股肉にフォークをぶち刺した。だが肉片を口に運ぶことはない。そしてにやにやししながら、説明に入る。
「殺しさ。それも俺たちが泊まってるホテルの噴水で見つかった。中年女の惨殺死体だ」
ボールデンは身を乗り出した。
「宿泊者は全員重要参考人だ」

「翌朝、ホテルの料理人からメイドまで全員事情聴取が
はじめた。お前んところにも来たはずだ警察」

「寝てたのか?!」ブリジスはボールデンの鼻をフォークで突いた。

「還流型の噴水が、血に染まり、赤い水となって吹き上げられ、ふやけた死体に降り注いだ」

ソウル女が嬉しそうに続ける。

「赤い噴水に女死体浮かぶ。新聞社は大喜びよ。この一週間ソウルはその噂で持ちきりだわ」

「殺られたのはコリアンか」

ボールデンが訊いた。

「お前が知ってるだろう!」へらへら笑いながらブリジスは続けた。

「身元不明なんだ」

「公表できないのよ。いずれにしても東洋人よ」

「絞殺なのか?」とビンセント。

「死体は全裸。どこかで殺されてロッセホテルまで運ばれた。途中で身元証明に関連するものすべてをはぎ取った。乗り捨てられた盗難車が明洞のど真ん中で見つかった。トランクの血痕が一致した」

「体は刃物で傷だらけ、顔面はつぶれていたらしい」

「死体披露だ!」

ビンセントがはしゃいだ。

「ところが当局は突然捜査を打ち切ると発表したらしいわ」

「決まりだな、ボールデン」とブリジス。

「何かが発覚したと考えるべきよ」

「北だ。北の関与だ。北のブラックジョークだ!」

言ってブリジスは顔を上向きにしてつまんだソーセージをあんぐりとやってビールを流し込んだ。

ブリジスの脚色。ソウル女の補足。そこをビンセントが炊きつける。殺人は人々を魅了した。

香村は聴いてはいない。焼き豚を食べ尽くし、誰も手出しできない蛸をグイと掴んだ。両手でしばらく蛸と格闘する。包丁で細かく殺しても吸盤は舌や歯茎に付着する。簡単に喉を通過しない。胃で暴れる。

店の端でまた争いが始まった。日替わりの女たちは逃げ、殴りあう男たちはしらけて店を離れていく。入れ替わるように米軍のアーミーが大挙して店を占めた。若い

女が生きのいい西洋の男たちに近づき、酒を挟んで咲き乱れていく。

奥の玉突き場に男女の二人組みが入っていった。

店に音楽はない。

ジョークと殺気と下心で日没までまだ遠い時間から店はあやしくなる。

*

客席に立ちこめる煙草の煙を抜けて厨房全体が一望できた。料理人たちが機敏に動いていた。手前のカウンターには海老や人参、ピーマン、じゃがいもが山積みになっている。フライパンが跳ね、火が踊っている。

「J Vを呼び出そうとしたのはあんたね？」

前方を向き、姿勢を崩さず一定のリズムでワインを飲んでいたJ Vの代理人が斜め向かいに座る香村に言った。

生命力の逞しい蛸から手を離し、香村は女の顔を見た。ボールデンが勧めるワインを女のグラスに注ぐのは、少々気が引ける。

「若過ぎる液全体の統一と品位の欠落」

代理人の女は言った。

「何、それ」

「目の前のワイン、お気に召さないんでしょう」

女の言葉に香村は不快になった。

「コムラはバカンスさ」

ブリジスがニヤニヤして香村たちの会話に分け入ってきた。

「俺も、バカンス」

「バカンス」

ピンセントにアレサが合わせた。

「毎日バカンス」

ボールデンがリズムをつけた。

「夏の休暇に極東を選ぶ。いかれてるよ。正常じゃない。それもニッポン経由、戦争中のソウルだ」

「休戦中よ」ソウルの女は少し回りを気にしろと言いたげだ。

「似たようなもんだろ」とピンセント。

「大陸の半袖！ 民よ遊べ！」

ブリジスは立ち上がって叫んだ。
白ワインと新しいグラスを置いて若い娘が逃げていった。

ブリジスが右手親指で赤ワインの栓を抜き飛ばし、高い位置からグラスへ豪快に注いだ。ワインはグラスの縁を溢れ、テーブルに広がった。

そのグラスを日焼けた鼻に近づけて香りを確認し、スペイン女アレサは申し分ないわと大嘘をついた。

「コームラは俺が勧めたワインが気にいらんんだ」

ボールデンはアレサが口付けたグラスワインを香村に差し出した。

「飲めよ」

「極東にワインは存在しない。極東の諸君、立ち上がれ！」
ビンセントが大声で弁護する。

「ワインに死を！」ブリジスが立ち上がる。

「葡萄に塩を！」続けてアレサ。

「大陸の半袖、万歳！」酒瓶を振り回してボールデンが叫ぶ。

「ワイン革命だ！」ソウル女もグラスを天に向けて叫ぶ。

スペインの男女ははしゃいでいる。代理人の女は口の端で笑っている。

*

金日成の巨大こぶ。腐った脂肪。
何もかも美味しいよ。

*

丸二日間続いた嵐が嘘みたいに夕日は眩しく、香村たちの肌を刺した。ジリジリ気温が上昇している感じだった。小柄なソウル女が最短の距離を案内した。

「犬が死んでる！」

ビンセントが気味悪がった。

「心配いらない」

小径はますます狭くなった。

「おい、また転がってるぜ」

ブリジスが叫んだ。
「こいつ腐ってら」
「ポリバケツ、蓋開けてみて」
野犬が重なって死んでいた。
「臭せえ！ 犬狩りかよ」
「食用犬よ」
「最低だ！ くそばばあ！」

スペイン男が有刺鉄線を飛び越え逃げていった。ブリジスは集団から遅れ、死んだばかりの子犬を抱きかかえて親カンガルーみたいに歩いた。

往復八車線の道路に出た。戦争になればこの馬鹿でかい道路はいつでも滑走路に変わる。

通りに沿って銃を抱えた警備兵が一定の間隔で立っている。スペインの男女が瞬きのない顔を覗き込むと棒のような警備兵がうろたえた。

ブリジスが車道中央まで侵入すると、急ブレーキでやっと止まったドライバーの顔が恐怖で震えていた。ピンセントが車に向かって最敬礼すると車は急発進して逃げていった。二人の横を何台もの車が濁流のように避けて通っていった。

ソウル女がタクシーを捕まえた。

ブリジスが死んだ子犬を抱きかかえて後部座席に座った。ボールデンが続いた。ソウル女が助手席へ乗り込んだ。スペインの男女は扉を開けさせたままトランクのなかに納まった。店から盗んだ花瓶と花束を抱えて。

「東京で再会だ」
「きっと赤ちゃんに乳飲ませてる」
「俺の子供だろうな」
「そんなのわかるもんか」
「ひどい女だ。トーキョー！」

叫びながらピンセントはアレサに抱きついて花を街にまき散らした。タクシードライバーの顔が引き攣っている。

五人の傍若無人を乗せた車は濁流のなかを迷走し、薄暮へと消え、それを見届けるように黒塗りの車はやって来た。車は香村と代理人の女の横に静かに停止した。

口髭を蓄えたドライバーは、女を店の入り口までエスコートしてきたサングラスの男だ。

*

開いた自動ドアの真下で煙草を落とし女は靴の細すぎる先端で火を消した。

二人は崩れるように乗り込んだ。

「西へ向かって頂だい」

車は黙って動いた。

暴風雨がソウルの街をきれいに洗い流していた。オフィスの弱い灯りが夕闇に浮かんでいる。

ビル街と点在する日本式家屋のうえに大陸の月は丸い腰を降ろし、脇を槍のような暗雲が、無数の十字架が立つ東の丘陵をめざして猛スピードで流れていた。

車中には周波数の合わないラジオと街のノイズが煙っている。

「乞食、一人もいない」

突然女は口を開き、バッグから口紅を取り出した。

「私、ソウルはじめて。一週間滞在した。田舎にも足を延ばした。一人の乞食も見かけない」

女は強い赤を引き、手鏡のなかで新しい顔をつくった。

「ほんとに不思議ねえ。乞食のいない世界なんて」

香村は女の話から離れるようにまっすぐ前方を見た。

「真犯人、捕まるといいわ」

雨乞いするような眼で女は窓の外を見つめた。

1

*

南大門に収束してソウル市の交通は渋滞する。

香村はシートに身を沈めて煙草に火を点けた。女は脚を組んでいた。瞼を落とすと長い睫毛が影を作った。女は体を起こした。

「空港だ。急いでほしい」

香村はイギリス語でぞんざいに言った。ドライバーは東洋人だが極東育ちではなさそうだ。

深く胃まで吸い込んで、煙を窓ガラスにぶつけた。窓を下げると夏の気流が騒いだ。

速度を上げて車はソウル近郊を抜け、さらに漢河大陸橋を越えていく。河岸には急激な経済成長を支えてきた

工場群があって、その巨大な影が濃い闇のなかに紛れようとしてきた。

*

戒厳令下を照らし、茶碗のような月が窓に張り付いて追いかけてくる。

ドライバーはラジオを切った。

女は眼を瞑った。女のうなじや胸元から甘い香りが漂った。それは何か遠い昔嗅いだような気分だった。香村は幾分不快になった。

女の耳にぶら下がる金の飾りが車の揺れで動いた。わからぬ程ほんの少し。

月の光はしだいに鮮明になり、女の顔に注ぎ、首筋から手先へと注ぎ、やがて全体へと注がれていくだろう。

乞食、真犯人、……

1

*

迷宮入りの事件。人々はやがてそれを当然のように思い暮らし始めるだろう。

*

金曜日の朝、退屈していたらオワハカへ行きなさい。